

## 将来的に英語嫌いにならないための外国語活動の授業づくり

教科教育高度化分野(22821628) 佐藤 琳 太 朗

本研究では、領域を組み合わせた活動と領域を自己選択する帯活動を通して、将来的に英語嫌いにならないことを目指した外国語活動の授業づくりを目的とし、授業実践校の現状を把握するために授業実践の前後で意識調査を行った。実践前の意識調査を基に単元を計画して実践したところ、実践のあとでは肯定的な回答が増加したことから、領域を組み合わせた活動と領域を自己選択する活動の有用性が認められた。

[キーワード] 小学校外国語活動, 英語嫌い, 領域を組み合わせた活動, 領域を自己選択する帯活動

### 1 問題の所在

#### (1) 小学校外国語活動実施状況調査

文部科学省(2014)は、全国の公立小学校5,6年生22,202人と公立中学校1,2年生24,205人を対象に、小学校外国語活動実施状況調査を実施した。英語に対する意識について、「あなたは、英語が好きですか。」という問いに対し、小学生の70.9%、中学校1年生の61.1%、中学校2年生の50.3%が肯定的な回答をした。また、英語の勉強に対する意識について、「あなたは英語の勉強が大切だと思いますか。」という問いに対して、小学生の85.3%、中学校1年生の77.7%、中学校2年生の75.8%が肯定的な回答をした。このことについて文部科学省は、外国語活動に肯定的な小学生の割合が高く、中学生に上がると英語に対する肯定感に課題があるとしている。2017年改訂の中学校学習指導要領解説外国語編(2018)においても、「学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている」ことや、「生徒の英語力の面では、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することなどに課題がある」ことが指摘された。

#### (2) 昨年度の研究

昨年度までの研究において、「書くこと」と「話すこと[やり取り]」の言語統合型の活動を行うこ

とで英語の有用感が高まることを、授業実践を通して示すことができた。しかし、授業時間を十分に確保できなかったため、継続性が求められる帯活動や、単元を意識した授業づくりには至らなかった。授業実践のあとの振り返りの場面でも、ワークシートの中の質問項目において、「外国に行ったとき、使えそうな場面が来たときに、今日習った英語を使ってみたい・頑張って話してみたい」という問いに対して「まあまあ」と回答した児童も2割程度みられた。こうした児童が今後、英語嫌いにならないような手立てをとることが必要だと感じている。例えば、今年度の教職専門実習において、日常的に相手とコミュニケーションを図ることが得意な児童は、英語の「話すこと[やり取り]」を中心とした活動を通して英語がますます好きになる様子を見られた。一方で、日常的に相手とコミュニケーションを図ることが苦手な児童にとっては、自分が苦手な領域ばかりでの言語活動を行うことは苦手や嫌いを生むことに繋がってしまうのではないかと感じた。そのため、英語嫌いを作らない授業づくりを行うにあたっては、相手とのコミュニケーションを図ることを苦手とする児童にとって、自分で活動を選べるようにすることも必要だと考えられる。

#### (3) 外国語活動の成果と課題

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語科(2018)では、改訂前の高学年における外国語活動の成果について、「児童の高い学習意欲や中学校の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている」としている一方、「音声中心

で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない」「日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文法構造の学習において課題がある」「高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる」ことが課題として指摘されている。このことから、成果として「学習意欲」や「積極性」の向上が認められた一方で、課題も多いことがわかる。こうした成果と課題を踏まえ、2018年度から中学年で外国語活動が高学年で教科として外国語が行われるようになった。課題に挙げられていたように、中学校と小学校高学年で音声から文字の学習が円滑に接続されなかったことを考慮すると、4年生から5年生の接続部分をどのように扱っていくのか工夫が必要であることがわかる。また、児童が高学年で抽象的な思考力を高められるようするには、中学年の段階で児童にとって身近で具体的な場面設定をすることが重要となってくる。

## 2 先行研究の検討

安藤ら(1992)の入門期の英語指導で文法中心の指導と会話中心の指導を比較した研究によると、個人差を考慮せず二つを比較した場合には、ほとんどその効果に差がでなかった。しかし、言語知能に関する個人差を学習適性として考慮したところ、言語性知能が高い児童は文法中心の指導のもとでより効果的に学べ、逆に、言語性知能の低い児童は会話中心の指導のもとでより効率的に学んでいたということから、個に応じた適正な学習方法があることがわかる。これにより、全ての児童がその潜在的可能性を最大限に引き出すことができるということが推察できる。

川井ら(2020)は、6年生対象のSmall Talk(帯活動)として、教師と児童がワークシートに書かれた単語用いて会話のやり取りを繰り返し、そのあとで児童が伝えたいと思う単語を用いて文章を書かせるという授業を行った。当初は同じような表現が多かったが、繰り返し書く活動を行うことで、ただ書き写すのではなく、自分が伝えたい事を選んで書くことに興味や関心を持てるようになってきたものと推察している。

川井らは、この実践を「書く活動」として取り上げているが、「話すこと[やり取り]」と「書くこと」を組み合わせた活動として捉えることもでき

る。こうした領域を組み合わせる活動は、児童の興味や関心を持続させることができるものと考えられる。

青山ら(2016)は、3年生の児童を対象に10分間の帯活動として文字を扱った活動を2年間実践している。この実践から、青山らは「アルファベットが分かるようになったことや、自分で読めるようになったことに喜びを感じ、学習意欲に繋がっている様子うかがえた。また、アルファベットなどの初期の文字認知にも効果が認められた。徐々に無理なく文字に触れたことが、子どもの学ぶ意欲に影響し、その相乗効果によって技能面にも良い影響をもたらしたと考えられる。」と述べている。外国語活動の帯活動として文字を扱うことによって、児童の学習意欲が高まるだけでなく、小学校高学年や中学校での「読むこと」「書くこと」の導入にも有効だと推察する。

以上のことから、小学校の中学年と高学年の接続において、4年生と5年生のつながりに着目する。4技能をバランスよく組み合わせながら身近で具体的な場面を設定することや、4技能の中から取り組んでみたい活動を自己選択して学ぶことのできる授業を構成するなど、児童一人一人の学習適性に応じた学びにつながる授業づくりが必要だと考えられる。

## 3 本研究の目的

本研究では、単元を通して「話すこと[やり取り]」を中心にしながら、そのほかの領域等をバランスよく組み合わせた授業づくりを行い、授業終盤に児童自身が「好き」や「得意」を活かして自己選択する帯活動を設定する。こうした児童一人一人の学習適性に応じた学びによって、将来的に英語嫌いにならないような外国語活動の授業づくりを目的とする。

## 4 研究の方法

(1)授業実践校の実態を把握するために意識調査を行う。時期と対象は次のとおりである。

・時期：20XX年7月から20XX年8月

・対象：A県内B小学校第3学年から第6学年(3年生99名、4年生114名、5年生110名、6年生112名、計435名)

(2)昨年度の研究と意識調査結果を基に、将来的に英語嫌いにならないための外国語活動の授業

づくりを行う。

(3) 単元計画を基に授業実践を行い、意識の変容を見るために授業実践前後で同じ項目による意識調査を行う。

- ・ 時期：20XX 年 12 月から 20XX+1 年 1 月
- ・ 対象：A 県内 B 小学校第 4 学年(28 名)

(4) 授業実践前後での意識調査結果を基に、生徒の変容の状況及び分析を行う。

### 5 意識調査の結果分析と考察

#### (1) 調査の方法

本研究では、まず、第 3 学年から第 6 学年 435 名を対象として、7 月に意識調査を行った。アンケート項目の作成にあたっては、Gardner(2004)による「英語への興味」「動機づけの強さ」「英語学習への願望」「英語学習に対する態度」を調査する質問紙「attitude and motivation test battery」を基に、小学生向けに修正を試みた。アンケートは、小学生が 15 分程度で回答できるような形式や内容とし、3 件法(1 当てはまらない、2 どちらでもない、3 当てはまる)を用いた Google form での回答形式とした。

#### (2) 結果と考察

435 名中 352 名(3 年生 99 名、4 年生 109 名、5 年生 43 名、6 年生 101 名)から回答が得られた(有効回答率 80.9%)。表 1 には「英語への興味」「動機づけの強さ」「英語学習への願望」「英語学習に対する態度」の 4 つのカテゴリーに分け、各質問項目の平均値を記した。ここでは、5、6 年生の質問で用いた表現を示している。3、4 年生向けの質問では、同様の内容をひらがな表記にしたり、表現を簡単にしたりしている。なお、学年間の接続において、減少幅が最も大きい部分を網掛けにしている。

まず、全体的な傾向として、文部科学省による小学校外国語活動実施状況調査と同様に、実施校でも学年が上がるにつれて、減少傾向にあることがわかる。網掛け部分に関しては「1 英語への興味」と「4 英語学習に対する態度」の 2 つのカテゴリーで特に目立っている。このことから、児童の英語に対する興味や関心を引き出す課題やもっと英語を使いたいと思うような場面を設定することに加えて、児童が自ら考えようとする態度を育てることが大切だと推察する。

表 1 学年別意識調査の結果

質問項目	3年生 (n=99)	4年生 (n=109)	5年生 (n=43)	6年生 (n=101)
英語は好きですか	2.76	2.59	2.49	2.16
1 英語への興味 テレビやスマホで英語の番組・放送がかかっている時、自分から見ることもある	1.65	1.83	1.58	1.60
外国のニュースを読んだり見たりする	1.36	1.32	1.16	1.48
英語の歌を聞く時、注意深く聞き、歌詞の単語を聞き取るようとする	1.72	2.36	2.28	2.16
英語を使うことは楽しいと思いますか	2.80	2.64	2.40	2.30
2 動機づけの強さ 英語は役に立つと思いますか	2.58	2.83	2.88	2.80
日常生活で英語を使う機会がありますか	1.84	1.82	1.84	1.75
英語の「授業」は簡単ですか	1.92	1.87	1.93	1.99
海外の出来事について家族や友達とよく話す	1.64	1.60	1.67	1.68
英語を使えるようになりたいですか	2.85	2.84	2.67	2.57
3 英語学習への願望 今まで習ったことは使えていますか	2.23	2.49	2.47	2.23
英語の「授業」楽しいですか	2.74	2.73	2.40	2.13
英語の授業でわからない時は、すぐ誰かに聞いて教えてもらう	1.96	1.95	2.26	1.97
授業の中で友達と英語を使って話すことはできていますか	2.27	2.28	2.47	2.40
追加の英語の問題(発展問題などの少し難しい問題)が出た時は自ら進んでやっている			2.33	2.08
4 英語学習に対する態度 授業中の先生からの質問には積極的に答えるようにしている	2.00	2.17	2.28	2.32
家で英語の学習をしていますか	1.66	1.72	1.72	1.67
英語の授業で学んだことについて積極的に考える	2.19	2.38	2.33	2.30
自分は英語の学習を真剣に取り組んでいると思う	2.49	2.55	2.14	2.02
英語の問題が出たら、注意深く考えて答える	2.58	2.68	2.47	2.33
英語の問題を解いていて、間違えを見つけたら、なぜ間違ったかを考えてすぐ直す			2.23	2.24

次に、図 1 の「英語が好きですかに 1 もしくは 2 と答えた人に質問です。どの時期から嫌いになりましたか。」という問いに対する回答で、一つ前の学年の英語の授業から嫌いになったという割合を調べてみる。例えば 3 年生では、31.8%が外国語活動を学ぶ前に嫌いになっていることがわかる。同様に 4 年生では 51.4%が 3 年生のうちに、5 年生では 54.5%が 4 年生のうちに、そして 6 年生では、43.9%が 5 年生のうちに嫌いになっている。

表 2 では、児童がつけたい力は何かを調査した結果である。どの学年を見ても、話す力を選んでいる人が 7 割から 8 割程度と多く、単語を除いた各項目でも 5 割程度が選んでいることがわかる。このことから、「話せるようになりたい」という思いのほかにも「書けるようになりたい」「読めるようになりたい」等の気持ちを持つ児童が半数程度いるため、児童の意欲を維持しながら授業を行えば、「話すこと」以外の活動を増やしても意欲的に

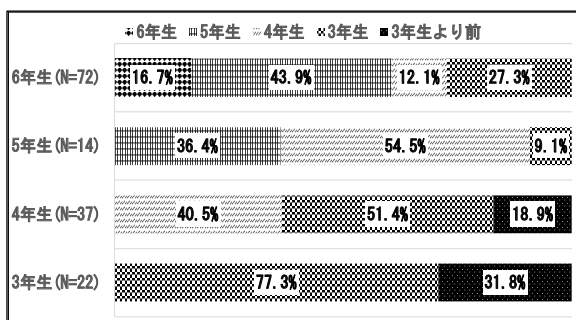


図1 「嫌いになった時期」

表2 「つけない力」

	3年生 (n=99)	4年生 (n=109)	5年生 (n=43)	6年生 (n=101)
話す力	78.8%	88.1%	86.0%	68.3%
聞く力	47.5%	52.3%	58.1%	53.5%
読む力	55.6%	61.5%	58.1%	58.4%
書く力	42.4%	51.4%	44.2%	48.5%
単語	26.3%	33.0%	34.9%	49.5%

表3 「英語を使ってしてみたいこと」

	3年生 (n=99)	4年生 (n=109)	5年生 (n=43)	6年生 (n=101)
外国人の友だちを作りたい	54.5%	53.2%	48.8%	38.6%
インターネット上で外国人の友だちと話せるようになりたい	15.2%	16.5%	14.0%	24.8%
日本にいる外国人と話せるようになりたい	50.5%	50.5%	37.2%	48.5%
外国に行って外国人と話せるようになりたい	50.5%	46.8%	51.2%	38.6%
英語を使う仕事について活やくしたい	29.3%	25.7%	25.6%	17.8%
日常会話を英語にしたい	19.2%	14.7%	18.6%	23.8%
外国で暮らしてみたい	20.2%	29.4%	25.6%	28.7%

取り組むのではないかと考えられる。ここで4年生に着目すると話す力、読む力、書く力をつけたいと考えている児童の割合が、他の学年と比べて高くなっている。

最後に、表3では英語を使ってどのようなことをしてみたいかについての調査の結果である。どの学年の結果を見ても、例えば「外国人の友だちを作りたい」といった目的や場面、状況が明確に示されている項目では、他の項目と比べて割合が高いことがわかる。このことから、児童が目的や場面、状況を捉えることができるような授業づくりは、英語嫌いにならないために必要であると推察される。

## 6 授業の計画と実践

### (1) 単元構成について

本研究では、小学校の中学年と高学年の接続において、4年生と5年生のつながりに着目して授

業づくりを行う。表2に示した意識調査の結果から、児童が英語でつけない力として、話す力、読む力、書く力の3つに対して特に興味・関心が高い4年生で授業を実践することとした。実践にあたっては、「Let's Try2」のUnit7「What do you want?」の単元で行う。この単元で実践を行う意図は二つある。一つ目は、表3に示した意識調査の結果から、英語嫌いにならないための授業づくりにおいて、具体的な目的や場面、状況を想定しやすい活動を設定しやすいと考えたからである。二つ目として、本単元は文字への意欲が高められるUnit6「アルファベット」の直後に位置付けられており、「書くこと」の領域に対する意欲が高い状態で、領域を組み合わせた活動と自己選択する帯活動を行うことができると考えたからである。このことから、単元を通して「話すこと[やり取り]」の領域を中心にしながら、そのほかの領域等もバランスよく組み合わせた活動を設定し、授業終盤には児童自身が「好き」や「得意」を活かして自己選択する帯活動も設定する。こうした児童一人一人の学習適性に応じた学びにつながる授業づくりを行うことで、将来的に英語嫌いにならないような手立てを考えたい。

### (2) 単元について

【単元名】What do you want?[Let's Try2 Unit7]

【児童について】

当該学級では、外国語活動の時間を楽しみにしていたり、授業に対して真剣に取り組んでいたりと、そうした児童の大半は、日常的な場でも他者とのコミュニケーションを図ることが得意であると感じている。Unit6「アルファベット」の単元での授業では、アルファベットを読むことや書くことに意欲的な児童が多く、意識調査の結果と同様にフォニックスソングを聞いて歌う場面で意欲的に活動している児童もいれば、単語を書く練習をしてみる際に意欲的に活動している児童も見られた。

児童Aに注目すると、先生の発問は聞いているが答えることができなかつたり、友達とのやり取りの際は考えすぎで黙り込んでしまつたりする様子が多く見られた。児童BとCに注目すると、二人とも他者とのコミュニケーションを図ることは得意な児童ではある。しかし、以前から「外国語の授業は嫌い。話せないし、何を言っているかわからない。」「なんでやるの、英語嫌い。」と話

すなど、英語を勉強する意味をあまり見出せない様子が見られた。児童BとCは、「話すこと[やり取り]」の活動では積極的に相手とコミュニケーションをとろうとするものの、「聞くこと」、「話すこと[発表]」の活動では、あまり意欲的に活動する様子が見られなかった。

#### 【教材について】

本単元では、身近な食材について取り上げながら、ほしいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、単元の終わりに自分たちで考えたオリジナルメニューを発表していくことをねらいとしている。そのために、チャンツやゲームで食材の単語や欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、それらの言語材料を使って友達とコミュニケーションを図る楽しさを味わわせていく。本単元で扱う「What do you want?」は、前単元で取り扱った「Do you want ○○?」を発展させた表現であり、相手の欲しいものを1回で知ることができる表現となっている。また、返答をするときには「I want ○○.」という表現を使用することで、5年生以降での教科学習における文構造への気付きにつなげていくための単元となっている。

単元序盤で、一つ前の単元である「Unit6 アルファベット」を使いながら、新出表現である「What do you want?」を使うゲームを通して表現に触れていくことができる。また、「What do you want?」に加えて、既習事項である「Do you have a ○○?」「Yes, I do.」「No, I don't.」を使う機会も設けることができるため、既習事項に触れながら、新出表現と既習表現の組み合わせから有用感を引き出していくことができる。

#### 【指導内容について】

外国語活動の目標には、「聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」を育成することが示されている。知識・技能に関するところでは、「日本語と外国語との音声の違い等に気付く」こと、思考力・判断力・表現力等に関しては、「身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちを伝え合う」こと、学びに向かう力・人間性等の涵養に関しては、「相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする」ことを意識した活動を行う。

このことを受けて、前単元で扱った「アルファ

ベット」の既習事項を本単元で活用するために、大文字小文字を用いたゲームを設定する。既習事項であるアルファベットの文字の読み方に慣れ親しみつつ、本単元の「What do you want?」を使い、積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度を培うことをねらいとする。

#### 【指導方法と指導上の留意点】

1 時間目は、ひとつ前の単元で学習した「アルファベット」に触れ、既習事項の確認をしつつ、授業終盤の陣取りゲームが円滑に進むようにする。その後、本単元でよく扱う食材の英語の音声に触れさせ、ワードカードを用いて慣れ親しませながら、日本語と英語の音声の違いに気づかせていく。そのためには、まず教師の発音を聞き、児童はそれを真似て発音する。次にワードカードに書いてある単語を読む。このように教師の声がけを明確に行う。以降の授業でも同じ手立てを用いる。

2 時間目は、「What do you want?」の表現を使い、相手の欲しい食材を聞き、答えた食材のカードをもらう活動を行う。言語材料については、ゲームなどで慣れ親しんだ食材を扱う。

なお、1, 2 時間目は、本単元で扱う「What do you want?」を用いた陣取りゲームを行うことで、相手の欲しいものを知る表現に慣れ親しませるようにする。陣取りゲームの段階で自分の欲しいアルファベットの読み方がわからない場合は、書き示しても指で示してもよいという指示を与えることで、覚えなければならないという負担感を減らせるようにする。

3 時間目は、自分の欲しい食材を決め、ペアで食材を取り合い、限られた食材を用いてパフェを作ることで「What do you want?」の表現に慣れ親しみながらゲームを行っていく。それを違うペアに紹介し、どちらがよいか選んでもらう。

4 時間目は、「What do you want?」を用いて友達から食材を手に入れ、オリジナルピザを作る。本単元で扱う「What do you want?」「I want ○○.」という表現に加えて、既習表現の「Do you have a ○○?」「Yes, I do.」「No, I don't.」を使うことができるようにする。

5 時間目は、前時で完成したオリジナルピザを友達に紹介する。自分の作りたかったピザになっているかどうかについて触れながら、グループの中でやり取りをする。

なお、4、5時間目は、児童に有用感や楽しさを実感させるための手立てとして、取り組みたい領域を児童に選択させて、「好き」や「得意」を活かした活動にする。あくまで外国語活動であることから、「読むこと」「書くこと」の評価は行わない。ペアでほしいアルファベットをとっていくゲームから、ペアで自分の欲しい食材を取り合うゲーム、そして個人でオリジナルメニューを考えて自分の作りたいピザを作るために食材を集める活動へとつなぐことで、ほしいものを尋ねたり答えたりすることができるようにする。

3時間目までの陣取りゲームや食材を取り合うゲームを行うことで、本単元の新出表現を活動の場面で用いることへの不安を減らし、相手と思いや考えを伝え合いたいという気持ちを高めていく。そして単元後半では、オリジナルメニュー作りを通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や相手に配慮する姿勢の育成へとつなげていく。

(3) 英語嫌いにならないようにするための手立て

#### ①領域を組み合わせた活動(単元全体)

全ての時間で、用いる表現を見て確認することで「読むこと」意識できるように視覚支援を行うことで、「話すこと [やり取り]」で表現を読みながら話すことができるようにする。単語に触れる活動では、先述したように、児童には教師の発音をまず聞いて発音し、次にワードカードに書いてある単語を読むように指示する。

また、1、2時間目で行うアルファベットを用いた陣取りゲームを行う際に、ただやり取りをしながらゲームを進めるのではなく、欲しいアルファベットの読み方がわからないときはゲームのワークシートに書いてあるアルファベットを模して書くことで、自分の欲しいアルファベットを相手に伝えるように指示をする。

#### ②領域を自己選択する帯活動(4、5時間目)

4、5時間目では、帯活動として「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の中から取り組みたい領域を自分で選ぶようにする。自分の「好き」や「得意」な領域を自己選択することで、英語への苦手意識の軽減につながるようにする。このように、児童一人一人の学習適正に応じた活動を行うことで英語学習に対する興味や関心を持続できるようにする。この活動は5、6年生の外国語科における4技能につなげるものである。

#### (4) 実践

1時間目と4時間目で実践を行った。

##### ①1/5時間目

1時間目に前時の学習であるアルファベットと本単元で扱う「What do you want?」を用いた陣取りゲームを行った。また、それにアルファベットを書いて相手に伝えることを取り入れて行うことで領域を組み合わせた活動を行うことができた。アルファベットの読み方をあまり覚えられていない児童や忘れてしまった児童が書いて伝えることでゲームを進めている様子が見られた。また、アルファベットを発音することと書くことの両方を行っている児童もいた。児童の振り返りの場面では、ゲームへの勝敗にこだわった振り返りを書いた児童が半数いた。一方、「陣取りゲームに使った「What do you want?」「I want ○○.」は色々なところで使えるのでこれからも使っていきたい」「アルファベットをいっぱい書くことができてよかった」という振り返りを書いている児童もいた。「外国語は嫌い」と訴えてきていた児童Bは、「私は、外国語が苦手だけど、楽しく遊べてよかったです」と書いている。ただ「ゲームが楽しくて良かった」ということではなく、「苦手だけど」という文言が入っていることから自分の苦手だと感じている外国語の授業でも意欲的に参加できていたことがわかる。また活動中の様子を見ても、ゲームのワークシートを「もう1枚欲しい」と言いに来て、一度目とは別の児童に声をかけ、もう一度ゲームを楽しんでいた。

これらのことから、外国語に対して「苦手」、「嫌い」を感じている児童に対して、「書くこと」と「話すこと[やり取り]」の領域を組み合わせた活動は、児童の興味や関心を持続させることに有効であることが示唆された。

##### ②4/5時間目

4時間目に「What do you want?」を用いて友達から食材を手に入れ、オリジナルピザ作りを行い、授業終盤の10分で領域を自己選択する帯活動を行うことができた。こうした活動は今回が初めてであったことから、説明の段階では、どの領域を選んだらいいのかわからないというような戸惑いから、自分が選択する活動に挙手を求めた時は、周りの様子を伺いながら手を挙げる児童が多かった。しかし、活動を開始すると日常的に他者とのコミュニケーションを図ることが得意な児童

らが「話すをやろう」「書くをやろう」というような声があげたことを皮切りに、他の児童らも自分のやることを決め、活動に入っていた。「話すこと」の活動には、主に授業でよく発言をする児童や仲の良い友達と一緒に活動したいという児童のほか、勉強は苦手だがコミュニケーションを図ることは得意な児童が選択し、ワークシートを見たり、お互いに質問の仕方と答え方を確認したりしながら活動をできていた。「聞くこと」の活動を選んだ児童は、英語に対して苦手や嫌いの感覚を持っていない児童がほとんどだった。この活動は、他の活動が終わった後に二つ目として選ぶ児童が多かった。「書くこと」の活動は、選べない児童がとりあえずできそうな活動として選ぶことが多かった。「読むこと」の活動は英語に自信のある児童や英語学習に意欲的な児童が選択していた。そのほとんどの児童が正答し、すぐに次の活動に移っていた。児童 A が授業内で教師に話しかけ、「書くと読むだけやっついていいの？」と問いかけてきた。この児童は授業中あまり発言しないことから授業に対して消極的なのかと思っていたが、自分のやりたい活動を選び、自ら進んで取り組んでいる様子が窺えた。児童 B は話す活動に真っ先に行き、取り組み始めた一人であった。自分がこれならできるというものを見つけ、活動に向かうことができていた。他の児童も自分のできる活動を見つけ、一生懸命に取り組み、できたら次の活動へとこのように活発に行っていた。「話すこと」「書くこと」「聞くこと」「読むこと」の順番に人数が多くなることを予測していたが、それぞれの活動に取り組んでいる児童が常にいる状態が終始続いた。このことから、児童らはどの領域に対しても意欲を持って活動していることがわかった。

(5) 授業前後の意識調査の結果の比較

表 4 は授業実践を行う学級の授業前の意識調査の結果を抽出し、授業後にとった調査結果を表 1 の意識調査の結果と同様に「英語への興味」「動機づけの強さ」「英語学習への願望」「英語学習に対する態度」の 4 つのカテゴリーに分け、各質問項目の平均値を記した。表 4 からは、授業後の調査結果は授業前の調査結果より高い結果になっている項目がほとんどである。「英語は好きですか」「英語を使えるようになりたいですか」の質問項目に着目すると、大幅に増加している。このこと

表 4 授業実践学級の授業前後の意識調査の結果

	質問項目	授業前 (n=28)	授業後 (n=28)
1 英語への興味	英語は好きですか	2. 25	2. 61
	テレビやスマホで英語の番組・放送がかかっている時、自分から見ることもある	1. 82	1. 79
	外国のニュースを読んだり見たりする	1. 39	1. 46
	英語の歌を聞く時、注意深く聞き、歌詞の単語を聞き取ろうとする	2. 29	2. 39
	英語を使うことは楽しいと思えますか	2. 54	2. 57
2 動機づけの強さ	英語は役に立つと思えますか	2. 61	2. 68
	日常生活で英語を使う機会はありますか	1. 96	2. 11
	英語の「授業」は簡単ですか	1. 96	2. 04
	海外の出来事について家族や友達とよく話す	1. 68	1. 57
	英語を使えるようになりたいですか	2. 75	2. 93
3 英語学習への願望	今まで習ったことは使えていますか	2. 39	2. 54
	英語の「授業」楽しいですか	2. 50	2. 61
	英語の授業でわからない時は、すぐ誰かに聞いて教えてもらう	1. 93	1. 75
	授業の中で友達と英語を使って話すことはできていますか	2. 14	2. 18
4 英語学習に対する態度	授業中の先生からの質問には積極的に答えるようにしている	2. 00	2. 04
	家で英語の学習をしていますか	1. 68	1. 93
	英語の授業で学んだことについて積極的に考える	2. 32	2. 18
	自分は英語の学習を真剣に取り組んでいると思う	2. 39	2. 29
	英語の問題が出たら、注意深く考えて答える	2. 50	2. 57

から、今回の授業では英語に対する興味、動機づけ、願望、態度を向上させることができたということがわかる。

7 考察

授業実践において英語嫌いにならないようにするための手立てについて考察する。

(1) 領域を組み合わせた活動について

川井ら (2020) の研究における実践では、9 割の児童が授業内で英語を書くことに好意的であり、そのうち 6 割の児童は難しさを感じていないという結果であった。文字指導は、児童の現状に

合ったふさわしい活動だと川井らは考察している。一方、筆者の実践前後の調査結果で、「英語は好きですか」「英語を使えるようになりたいですか」の項目において、実施後に数値が大幅に増加していることから、領域をバランスよく組み合わせた活動を行う際に、身近で具体的な場面を設定することで児童の興味や関心を持続させることができると考えられる。

#### (2) 領域を自己選択する帯活動について

表4の実践前後の調査結果で「英語の授業は簡単ですか」「英語の授業は楽しいですか」の両項目が実践前よりも実践後の方が高い数値を示している。本実践では、自己選択する場を児童に与えると進んで活動に取り組む様子がみられたので、「好き」や「得意」を活かすために自己選択する場面を設定することは、児童に有用感や楽しさを実感させることにつながるものといえる。

さらに、本実践の4時間目で領域を自己選択する帯活動を行った際、「終わったら次へ」という児童の活動の流れが自然にできていた。このことから、自身の「好き」や「得意」な領域で自信をつければ、他の領域にも積極的に取り組もうと挑戦する態度がみられたことは驚きであった。

## 8 成果と課題

### (1) 成果

本研究では、授業実践前後の意識調査を通して児童の変容を明らかにすることができた。具体的な成果としては、特定の領域だけに着目した授業ではなく、複数の領域をバランスよく組み合わせた活動を行うことで、児童の英語への興味や関心を持続させることができた。また、授業終盤に児童自身の「好き」「得意」を活かして領域を自己選択する帯活動を行うことを通して、児童に有用感や楽しさを実感させることができた。こうした手立てによって、将来的に英語嫌いにならないための外国語活動の授業づくりができたのではないかと。

### (2) 課題

将来的に英語嫌いにならないための授業づくりを目指しているため、児童の発達段階に応じて外国語へ興味、態度等を育む必要がある。本研究では、小学校外国語活動の授業づくりに限って考察したが、小学校高学年や中学校さらには高校、大学までどのようにつなげていくのが課題で

ある。

## 引用文献

安藤寿康・福永信義・倉八順子・須藤毅・中野隆司・鹿毛雅治(1992)「英語教授法の比較研究—コミュニケーション・アプローチと文法的・アプローチ—」,『日本教育心理学会』,第40巻, pp. 247-256.

青山祥子・畑江美佳・段本みのり(2016)「読むこと・書くこと」に対する中学年児童の学ぶ意欲を育む取り組み—アクティブ・ラーニングに繋げるための素地作り—,『四国英語教育学会「紀要」』,第36号, pp. 65-74.

川井一枝・栄利滋人・鈴木渉(2020)「小学校第6学年の児童を対象とした書く活動の報告—ワークシート・質問紙・観察に基づいて—」『小学校英語教育学会誌』,第20巻(2020),01号, pp. 52-67.

文部科学省(2014)「平成26年度 小学校外国語活動実施状況調査」,

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362169\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362169_02.pdf) (最終閲覧日2024年1月30日)

文部科学省(2018)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語編」,開隆堂, p. 6.

文部科学省(2018)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語活動・外国語編」,開隆堂, pp. 6-8.

## 参考文献

Gardner, R. C. (2004) Attitude/Motivation Test Battery : International AMTB Research Project,

<http://publish.uwo.ca/~gardner/docs/englishamtb.pdf> (最終閲覧日2024年1月30日)

奈須正裕(2022)「個別最適な学び」の足場を組む。』,教育開発研究所, pp. 116-123.

*Creating classes with foreign language activities to avoid hating English in the future*  
Rintaro SATO